Sunshine

図書館だより

実習お疲れ様でした！お帰りなさい♡
＊＊ 純真生のみなさんへ ＊＊

1年生は初めての、2年生は最後の実習を終えました。実習を乗り越える度にたくましく成長する皆さんの姿には目を見張るものがあります。一人ひとりが頑張った証ですね。

実習を終えた学生に絵本に関するアンケートをとってみたところ、1年生も2年生もほぼ全員が実習で絵本の読み聞かせを実践し、そこから多くの学びを得たようです。子どもを相手に絵本を読む難しさを感じたり、自分の読む絵本に目を輝かせながら反応する子どもの姿に感激したりと、保育者になるための大切な気づきを得てきた様子が書かれていて、読んでいてとても嬉しくなりました。

また、アンケートの中で一番好きな絵本について尋ねてみました。すると意外にも上位はどれも40年以上前に創刊されたものばかり。幼い頃に読んでもらった絵本の記憶は思い出と共にずっと人の心に残ることを実感しました。皆さんが実習で読んだ1冊もきっと子ども達の心に残っていることでしょう。

秋の夜長、思い出に浸りながら自分の好きな絵本を読み返してみてはいかがでしょうか。また新たな発見がそこにあるかもしれません。

（塚越亜希子）

第20号発行
2023年
11月6日

純真祭・ハロウィンデーとにぎやかな楽しいイベントが終わり、落ち着いた日常が図書館にも戻ってきていると感じる今日この頃。後期授業で使う資料を探しに、多くの人が来館してくださっています♪♪

純真祭「しおり屋さん」へのご来店ありがとうございました♪

10月21日・22日の純真祭で図書委員会では「しおり屋さん」を出店しました。また、2年生が作成した絵本紹介のポップも展示しました。しおりを手作りできるコーナーと図書委員さんが作ったオリジナルしおりの販売はどちらも大盛況。出店責任者を担ってくれた1年生図書委員Hさんの感想です。

「小さいお子さんから、大人の方、学生、保護者の方など、色々な方にしおり作りに来ていただけてうれしかったです。次年度もたくさんの方々に来ていただけるような工夫をしたいと思います」

読書マラソンにチャレンジしませんか？

読書の秋です♪今年も11月20日より読書マラソンがスタートします。図書館で借りた本を読んでポイントを貯めましょう！ポイントを貯める冊子「読書ノート」は図書館にあります。来年1月20日までに、ポイントを達成するとうれしい特典もあるので、ぜひ挑戦してみてくださいね！

※参加方法の詳細は図書館スタッフまで！

☆雑誌付録抽選のエントリーもはじまります！
エントリー期間　11月20日(月)～11月30日(木)

先生のオススメ本

瀬戸 奏 先生

『猫は、うれしかったことしか覚えていない』
石黒由紀子 文・ミロコマチコ 絵

うれしかったことを積み上げて生きていく

タイトルを見ると、猫を飼っている人が読む本なのかな？と思うかもしれません。確かに我が家にもモカちゃんという大切な家族がいて、華やかな表紙とタイトルに惹かれてこの本を手に取りました。

『猫は、うれしかったことしか覚えていない』は、飼い猫が梅干しの種を飲み込んでしまった際の手術をしてくれた獣医師さんの言葉だそう。種で遊んで楽しかったということしか覚えていない、猫とはそういう生き物であると。

「猫は過ぎたことを引きずることなく、うれしかったことだけを積み上げて生きていく」と著者は述べており、毎日機嫌よく過ごすコツを身に着けている猫の暮らしぶりから受け取った「生き方のヒント」が詰まっています。人間に置き換えてみると、なんだかしっくりくる！と共感したり、こんな人生観もあるのだな、と心が軽くなったりする1冊です。可愛らしいイラストとクスッと笑えるエピソードばかりで読みやすいと思うので、猫派・犬派問わず、ぜひ読んでみてください。

昔話・民話　絵本の紹介

「むかしむかしあるところに…」と始まる昔話は、想像の世界を楽しめ、言葉の響きやリズムの心地良さがあります。最近の絵本とはまた違った良さがあるのでぜひ実習などで読んであげてください。年長さんにおすすめです。

『したきりすずめ』

再話　石井桃子
画　赤羽末吉
出版社　福音館書店

じいさ（じいさん）は、１わのすずめを自分の子どもみたいに可愛がっていました。しかし、ある日、妻のばあさ（ばあさん）がつくったのりをすずめは食べてしまい、怒ったばあさは、すずめの舌をちょん切ってしまいます……。それを知ったじいさはすずめに謝ろうと、「すずめやすずめすずめのおやどはどこじゃいな……」と探しに行きます。情感あふれる文章と素朴で美しい丹緑本風の絵が完璧な絵本の世界を作りあげます。―福音館書店ホームページより引用―

『いっすんぼうし』

著者　いしいももこ
絵　あきのふく
出版社　福音館書店

子がいないおじいさんとおばあさんは、お天道様に「こどもを　おさずけください」と拝んでいました。そのうち、おばあさんのおなかが痛み、小さな小さな男の子の赤ん坊が生まれました。赤ん坊の体の大きさは、手の親指くらいの大きさです。おじいさんとおばあさんは、お天道様の思し召しだと、たいそう喜びました。なじみ深い一寸法師のお話が、完全な再話と美しい絵で、子どもたちの心によみがえります。 ― 福音館書店ホームページより引用―

『わらしべちょうじゃ』

作・絵　植垣　歩子
出版社　あすなろ書店

貧乏だけど、親切で、心のやさしい若者。　夢の中で、かんのんさまから「あすの朝、みちで最初に手にしたものを大事にしなさい、きっといいことありますよ」とのおつげが。元気よく家を出たとたん、転んで最初につかんだのが、わらしべでした。そのわらしべに、飛んできたアブを付けて歩いていると、ひょんなことから、それがミカンへと変わり、その次は…わらしべ1本しかもっていなかったのに、どんどんと、めぐりめぐって、いつしか大金持ちに!!

『へっこきよめさま』

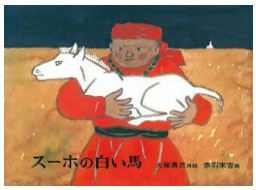
文　冨永　佳与子
絵　高見　八重子
出版社　鈴木出版

この『へっこきよめさま』は、どこにでもある普通の嫁入り話からはじまります。嫁さまも、むこどんも、姑のばあさまも、良い人ばかりが暮らしていた昔々。大きな声で、何度でもくり返し楽しんでみたい、リズミカルな言葉が、そののどかさとおおらかさを伝えます。

ところが　そのうちに
よめさまは
むずむず　そわそわ
あかい　かお……

きれいで、やさしい、働き者の嫁様にも、たったひとつ困ったくせがありました。さて、それは―――？　―鈴木出版ホームページより引用―

『スーホの白い馬』



再話　大塚　勇三
画　　赤羽　末吉

昔、モンゴルの草原にスーホという少年がいました。ある日、道ばたに倒れていた生まれたばかりの白い子馬を世話し、大事に育てましたが……。馬と少年スーホの哀切な物語と、モンゴルに伝わる楽器「馬頭琴」の由来が描かれ、感情を揺さぶられるでしょう。横長の画面を生かし、モンゴルの大平原を舞台に雄大に描ききったこの絵本は、国際的評価を受けています。―福音館書店ホームページより引用―

『おおきなかぶ』

再話　A・トルストイ
訳　　内田　莉莎子
画　　佐藤 忠良
出版社　福音館書店

おじいさんが植えたかぶが、甘くて元気のよいとてつもなく大きなかぶになりました。おじいさんは、「うんとこしょどっこいしょ」とかけ声をかけてかぶを抜こうとしますが、かぶは抜けません。おじいさんはおばあさんを呼んできて一緒にかぶを抜こうとしますが、かぶは抜けません。おばあさんは孫を呼び、孫は犬を呼び、犬は猫を呼んできますが、それでもかぶは抜けません。とうとう猫はねずみを呼んできますが……。力強いロシアの昔話が絵本になりました。　―福音館書店ホームページより引用―